

第4回 知識共有コミュニティワークショップ報告

A Report of the fourth "Knowledge-share" community workshop in Sendai

折田 明子 (Akiko ORITA) ・ 田代 光輝 (Mitsuteru TASHIRO)

慶應義塾大学政策・メディア研究科・ニフティ株式会社

1. 経緯と目的

本ワークショップの開催のきっかけは、国立情報学研究所にて公開されている「Yahoo!知恵袋」のデータを活用している研究を発掘し、多分野の研究者間の交流や新たな協働を促進することであった。2008年にヤフー株式会社および情報社会学会との共催にて開催を開始して以来、本年は4回目の開催となる。本年は、プログラム委員長を折田明子（慶應義塾大学）、実行委員長を田代光輝（ニフティ株式会社）が担当した。

2009年に開催した第2回以降、「Yahoo!知恵袋」のデータを活用した研究に加え、比較研究や社会心理学的分析など、知識共有コミュニティという概念全般に関わるユニークな研究を対象としており、2010年に開催した第3回では、龍谷大学において初の関西圏での開催を実現し、かつ同日に東京・品川で開催された楽天研究開発シンポジウムと、インターネット中継による共同セッションを実施した。

第4回となる今回は、東日本大震災をふまえ、災害時に情報技術やコミュニティが果たすことのできた役割やその限界を振り返るとともに、今後、非常時を乗り越えるための知識共有および情報共有のあり方について議論の機会を作ることを目的とした。そのため、東北地域での開催を検討した結果、東北大学および秋保温泉を会場として一泊二日の日程で執り行った。招待講演を2件、うち1件はパネルディスカッション、うち1件は温泉にて参加者全員によるオープンなディスカッションを行った。また、研究発表は査読あり・査読なしの2種類を募集した。

2. プログラム構成

当日のプログラムは、(1) 招待講演 I とパネルディスカッション (2) 招待講演 II とディスカッション (3) 研究発表 (査読論文・一般論文) によって構成した。初日の午後、東北大学では、招待講演とパネルの後に、主に非常時や災害に関する研究発表を取りまとめ、夕刻に秋保温泉の宿泊地に移動してから招待講演と全体のディスカッションを行った。二日目は、宿泊地の会議室にて、知識共有一般に関する研究発表セッションを持った。なお、本ワークショップの様子は、動画配信サービス ustream による中継を行った。冒頭には、公文俊平会長より、ビデオメッセージをいただいた。

3.1 招待講演 I・パネルディスカッション

招待講演

「知識・ネットワーク・災害支援 – ”適正なる”知識と蜚雪技術」

パネルディスカッション

「情報支援・知識の共有」

大妻女子大学准教授／日本社会情報学会災害情報支援チーム代表 柴田邦臣氏

ニフティ株式会社 社会活動推進室室長 鈴木隆一氏

東京工業大学 寺野隆雄氏

モデレータ： 田代光輝（産業技術大学院大学／ニフティ株式会社）

本講演は、障害を持つ方の特例補装具の事例紹介から始まった。例えば、実際に使われ役立っている歩行器であるにも関わらず、基準の上では不適合とされ、利用者から取り上げられたという。「プラン・実践から評価まで整った専門知識」を適正なる知識とするならば、非常時に必要なのは、非適正なる知識である。「蜚雪技術」は、試行錯誤をし、流用と代替による技術であり、平常時の「適正なる知識」が役立たない非常時に役立つ「非適正なる知識」である。

被災地で必要とされたのは「ネットとテントが張れる人」であり、臨機応変にその場で手に入るものを使って必要なものを実現することができるのが、非適正なる知識による力であった。障害を持つ方々は、これまでもそ

うした非常時に対処してきたと指摘された。口で棒をくわえてタイプをするとき、その棒をひっかけておく場所があれば落としたりとしても大丈夫など、ほんの少しの工夫が大きな効果を生む。

具体的な災害支援活動として、宮城県山元町での「思い出サルベージ」写真保存プロジェクトが紹介された。津波の被害を大きく受けた山元町にて、回収されたアルバムから写真を一枚一枚洗浄し乾かして保存しなおしつつ、デジタル化を並行して行っているもので、アルバムを山元町のふるさと伝承館にて展示し、デジタル化したデータから検索も可能にしたものである。Google の Picasa の顔認識を使うことで、本人だけでなく姉妹や、その子ども時代も分かるといった工夫が紹介された。

続くパネルでは、山元町の支援に携わっているニフティ株式会社の鈴木氏から、企業の立場からの山元町での取り組みについて、東京工業大学の寺野氏からは非常時の情報共有についてのコメントがあった。



図1 招待講演 I 於 東北大学



図2 パネルディスカッション 於 東北大学

3.2 招待講演 II・全体ディスカッション

「非常時と知識共有を考える」

国立教育政策研究所 教育研究情報センター 主任研究官 江草由佳氏

モデレーター: 折田明子(慶應義塾大学)

このセッションは、秋保温泉の宿泊先にて、参加者が車座になって行われた。なお、資料は次の URL にて公開されている。<http://www.slideshare.net/yegusa/201112104>

本講演では、saveMLAK のご紹介をいただいた。博物館・美術館 (M)、図書館 (L)、文書館 (A)、公民館 (K) (M+L+A+K=MLAK) の被災・救援情報サイトをまとめている取り組みであり、サイトは Wiki のため誰でも情報提供をすることができる。最初から完璧な書き込みを期待せず、書き込める人が、そのときに書き込める内容を提

供することを重視し、書式の修正などは後からなんとでも出来ることが強調された。また、情報収集にあたっては、現地に負担をかけないように、たとえば電話をかけて現場に問い合わせないこと、としているという。現地を訪れることを含め、何らかのきっかけで知ることができた情報を共有する、それを積み重ねていく活動だ。また、現地に赴けない人でも、何らかの役に立てるということが強調された。

続いて、参加者を多く巻き込んだディスカッションセッションを持った。平時の備えとして「できる人ができることをやる」ための知識共有のあり方について議論がなされた。現地に行ける人、行けない人、行ったから分かること、そうでなく俯瞰するから分かることについて、様々な意見が出された。正解のある話ではなく、被災地における性質の違う取り組みについての意見交換によって、新たな気づきを得る機会になったと感じている。



図3 招待講演II 於 秋保温泉

3.3 研究発表セッション

初日には、査読論文および一般論文による研究発表セッションを行い、主に震災や非常時に関する研究発表がなされた。二日目は、知識共有一般に関する研究発表がなされた。

(1) 研究発表セッション 1 (査読論文) 座長: 江口浩二(神戸大学)

溝口佑爾(京都大学)

「情報ボランティアから思い出の救済へ 東日本大震災被災地山元町における IT 支援の試みの記録」

山田和明(東洋大学), 中小路久美代(株式会社 SRA), 山本恭裕(東京工業大学), 矢本光一(東洋大学)

「知識共有コミュニティの持続的発展のための共創インタラクションモデル」

石川尚季, 梅本顕嗣, 西村 涼, 渡辺 靖彦(龍谷大学)

「Q&A サイトで複数のアカウントを用いて 1 つの質問に複数の回答を投稿することを繰り返すユーザの検出」「QA2 部グフにおけるモチーフを用いたコミュニティの経時的変化に関する分析」

(2) 研究発表セッション 2 (一般論文) 座長: 岡本真(アカデミック・リソース・ガイド)

三浦麻子(関西学院大学), 楠見孝(京都大学), 小倉加奈代(北陸先端科学技術大学院大学)

「福島第 1 原発事故による食品の放射能汚染情報の信頼性評価(4): 時系列変化とオンラインメディア利用度による差異」

柴崎真理子, 藤田秀之, 木實新一, 有川正俊(東京大学)

「Q&A サイトにおけるユーザの要求・関心の時空間的な推移の可視化」

(3) 研究発表セッション 3 (一般論文) 座長: 難波英嗣(広島市立大学)

宇田周平(慶應義塾大学), 三浦麻子(関西学院大学), 森尾博昭(関西大学), 折田明子(慶應義塾大学), 鈴木隆一, 田代光輝, 佐古

裕(ニフティ株式会社)

「NIFTY-Serveにおけるフォーラムデータの分析と整形」

田中祐史,山本学,吉川厚,寺野隆雄(東京工業大学)

「ABSによる顧客間相互作用がロイヤリティ形成に与える影響の分析」

岡野匡志,三上達也(立命館大学)

「集团的認知モデルマネジメントとしてのコミュニケーションと集合知」

3. おわりに

第4回となる本ワークショップにおいては、東日本大震災を前提に非常時の情報共有を大きなテーマとして、合宿形式でじっくりと議論をすることができた。災害直後から今に至るまで、それぞれのフェーズで必要な情報やリソースは異なり、一つの解はない。また、平時から何ができるのかを備えていくことは、今後の情報と知識共有を考える上で大きなテーマとなるであろう。

初の試みとなって合宿形式の開催は、多分野の研究者がじっくりと議論に時間を使えるというメリットがあった。ワークショップの最後には、参加者から一言ずつ、次回への期待を含めてコメントをいただいた。参加者全員の自己紹介とコメントをワークショップの冒頭に行うことで、その後のコミュニケーションを深めるといった運営の工夫が必要であろう。また、参加者全員の議論が難しい場合には、紙に書いて回収するなど、多分野の協働を効率的に行う工夫の必要性も指摘された。なお、当日の研究発表セッション中、震度3の地震に見舞われたが、こうした時にセッションをいったん中止することや、事前に避難経路を確認するなど、ワークショップ運営においても非常時に備える必要がある。

なお、準備にあたっては、東北大学の木村雅史先生および秋保温泉ばんじ家の協力をいただいた。文末となったが、ここにお礼を申し上げたい。